The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「言葉」を行うこと
Author(s)	大北, 全俊
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　ソクラティク・ダイアローグの「臨床哲学的展開」

「言葉」を行うこと

大北全俊

今までソクラティク・ダイアローグ（ＳＤ）に参加しながら、ＳＤとは直接関係がないけれども、ずっと気になっていた事柄がありました。それは、部落差別がおきたときに行われる「事実確認会」なのですが、ここでは、「事実確認会」という実践を参照しながら、ＳＤの可能性を探求してみようと思います。

出典をあげると、『排除と差別のエスノメソドロジー』（山田富秋・好井裕明、新曜社）に納められている「〈反差別の意志〉と出会うストーリー」（好井裕明）という論文にその「事実確認会」についての言及があります。わたしは、この論文でしか「事実確認会」のことを知りません。また、「事実確認会」とはあくまで部落差別に関する「事実確認会」であって、これからわたしが記述しようとすることは、事柄の固有性を勝手に捨象して、ただそこで行われている実践の形式だけを問題にしようとしています。しかし、言い訳ではないのですが、「事実確認会」で行われているその形式的なことが、実は差別について考える場合、重要なのではないかと思うのです。そして、形式的なものがＳＤという実践の中心なのではないかと思うのです。

さて、「事実確認会」についてですが、その概要は以下のようなことです。この論文で描かれている限りでは、ある学校で部落差別に関する事件が起きた。そして、学校関係者とその事件の「事実を確認する側」が対面し、実際に何が起きたのか、起きたことの何が問題であったのか、そして何をすべきであるのか、それらの事柄を「言葉」で「確認していく」のです。はじめは、学校側はただ「起きてはならないこと」が起きたとし、まずは「謝罪」し、これからどうするかを報告します。論文の著者の表現を借りれば、そこでの学校側の「言葉」は、〈今－ここ〉からひたすら逃れるための言葉でしかありません。何があったのかただ「過去」を問題にし、これからどうするか「未来」しか語らず、現実にその「事実確認会」で対面している「確認しようとしている人たち」には、ただ「謝罪する」だけなのです。現在という〈今－ここ〉の場を「謝罪」によって逃れようとする。ある事件に関して、事実を確認するために、その場を引き受けて、「言葉」にしていこうとするよりも、なるべくなら穏便にその場を済ませてしまいたい。つまり、対面しているようで対面しようとしていない。対面せずに、目の前にいる人たちをお決まりの「カテゴリー」に整理したまま、そのこと自体を問題にしようとはしない。ここに「差別」そのものがあると言ってもいい。何が

起きたか「過去」を確認することと、これからどうするべきか「未来」を語り合うことが重要なことはいうまでもないですが、〈今−ここ〉という「現在」を引き受けること、つまり確認される内容ではなく、対面する人と「言葉」で「確認する」という「現在」の作業そのものが、何よりも重要なのです。語られている内容がどれほど立派なものでも、実際に行われている「行い」が全然その内容とは異なることをしているのならば、その「言葉」に意味はあるのか。学校側が、過去ではなく、まさにこの「事実確認会」という現在の場で「差別」を行い続けようとしたこと、そのこと自体を明らかにすること、そのことを学校側が確認すること、そうして初めて、これからどうするべきか「未来」を語ることが意味を持ち始めます。この事実確認会の実践を「言葉」と「行為」を一致させること、ただ「言ったことをその場で行うこと」と言い換えることができるのではないでしょうか。

今、これ以上「事実確認会」について論じることはしませんが、この「言葉」と「行為」の一致、各々が発した「言葉」を実践すること、しかも、それを他ならない〈今ーここ〉で実践すること、この実践とＳＤは関連していると思います。

ＳＤの実践は他ならない「言葉」によって行われます。一定のメンバーがある時間顔を合わせて、ある問題についてひたすら「言葉」で確認して答えを出す。例えば「理解するとはどういうことか」、ということが問題となったとしましょう。「理解とは・・・」と、いきなり抽象的な定義をうち立てるのではなく、ある個人の具体的な経験に則して全員が「言葉」で思考を共有していこうとする。結論をすぐに述べれば、そこでは「理解」についてその内容を考えると同時に、実際「理解」について何らかの実践を行うことを強いられる。ただモノローグとして「理解とは・・・」と言い放つだけではいくらでも都合のいい、きれい事を述べ立てることも可能です。しかし、そこで求められているのはあるメンバーが発した「言葉」を他のメンバーが共有することです。もし、ある「言葉」の内容と「行為」が一致していないとき、メンバー全員がそのような「言葉」を共有できるかどうか。あるいは、「言葉」と「行為」の不一致を演じてしまった当事者が、そのことに気付かずに済むか否か。「理解」について他のメンバーが発した「言葉」を理解し、あるいは自分が発した「言葉」を理解してもらう、つまり「言葉をその場で行う」という作業を求められるのです。そして、この二重の作業は、「理解」がテーマだから生じることではないと思います。例えば「ケア」をテーマにしても多分生じます。それはＳＤの形式的なところ、とりわけ「言葉を共有する」というところにあるのではないかと思います。

ただし、ＳＤのルールに従って、複数の人が、「言葉」を共有することが、自動的に「言葉」と「行為」の一致をもたらすわけではありません。むしろ、そういう「一致」に誰もがある程度目をつむらない限り、ＳＤは成立しないのではないか。むしろ厳密な「言葉」の「共有」をどこかで断念するからこそ、「言葉」の「共有」は成立するのではないか。穿った言い方をすれば、ＳＤは「言葉」と「行為」を一致させるのではなくて、それが一致しなかった事実を各人に刻みつけるのではないか。「言葉をその場で行うこと」、このことについては今後のＳＤの実践を通して、その可能性とともに限界についても考えていきたいと思います。

（おおきたたけとし）